

縷子（かづらこ）絶唱

その頃ボクは恋愛真っ盛りでした。想いがやっと実ったのです。でありましたから、毎日の生活に張りが生まれて楽しくて仕方ありません。当然といえば当然です。いい年をして恐れ多いのですが性の関係もあります。一週間の逢瀬が待ち遠しくて、待ち遠しくて。・・・

ボクには家庭があって、ということは当然、妻がいるわけですから今風に言えばボクの恋愛は不倫になります。そんな、不道德な、いや、いや、顰蹙極まる男女関係を臆面もなく口にするあなたの向こう見ずな見識を先ず疑う？と指摘されれば、返す言葉もありませんが。・・・況や人様の恋愛話など面白くも何とも無い、謂わずと知れた得意の自慢話が織り込まれているに違いない、訊きたくもない！と耳を塞がれてしまえば、それはそれまでですけど。・・・人間というヤツは度し難く、不幸話や失敗談には身を乗り出すくせに他人の幸せにはそっぽを向いてしまうもの、何ともいやはや！・・・

ボクは今年、七十歳、古希を迎えた黄昏の人です。そう名乗ると俄然、皆さん、多少ともボクの恋愛に興味を示すんじゃないありませんか、心を動かされるんじゃないありませんか、どうでしょう？。年寄りの恋愛？肉体が伴う？本当？・・・まあ、どんな具合か、一応話を聞くだけ訊いてみよう！ってのが本音でしょうな、老いらくの恋話を！・・・

一方、賢い人は、（秘すれば花）世阿弥の言葉通り、そんなことは決して口外にしないものだ、などとボクを内心、軽蔑しながら、身を乗り出すのでしょうか。・・・

万物の霊長を自負する人間という動物は生きている限り、男は女の深い慈愛を、女は男の力強い愛情を求めていることはいうまでもありません。物心つく十代の青春時代から命が尽きる間際まで年齢などに関係なく異性を恋焦がれるものです、違いますか？。・・・年老いて病床にあっても温かで優しい異性の看護師がいいと望むではありませんか。愛の無い生活ほど悲惨なものはありません、愛を喪失した日常ほど寂しさを感じることも無いでしょう。例え、家族に囲まれていても、夫妻が長く連れ添ったとしても、それが疑似であっては！深い空しさに襲われるだけです。・・・

いや、愛などという代物より、むしろ、金の方が先だ！金さえ有れば、そんな色恋も何んとかなる！という人声（じんせい）が方々から聴こえて来ます。世の中、九十

九%はその意見に相違ありません。金、金、金、まさに渡る世間は万事金に尽きますから。それに立派な肩書きでも付けば擦り寄る人間どもはゴマンといるものです。愛は幾らでも金で買えるのです。愛に絶対的な定義はありません。それ故に、どこまでが真実でどこまでが虚実だという見分けすら困難です。親子の愛、夫婦の愛、家族の愛、周囲への愛、様々な愛の貌、それらが仮面を被った愛があっても、それで何等不足を感じない人々、不満さえ忘れてしまった人々が、ノウノウと生きているのが実情かもしれません、経済優先の不毛な現代社会においては。・・・

ボクに家族があることは先ほど申しました。既に四十年に及ぶ家庭生活ですが、正直に申せばここ十年はまったく夫婦らしい形態はなくなりました。無論、それにはそれ相応の理由や原因がありますから一方的に妻を非難する事は出来ませんし又、夫であるボクが悪者であるという責めを負う訳にもいかないのです。つまり、根本的には相性が良くないことが歴然となったと言うのが当たっています。お互いの価値観に相違があって徐々にものごとへの対応の仕方にズレが出来たこと、軋みが治らなかったことが正解なのです。些細なことで食い違いが起きると口喧嘩になり、果ては双方が罵り合うところへ発展し、いやはや、自分でも後味の悪さに辟易してしまいます。これが四十年連れ添った男と女の成れの果て？と思うと呆然とした想いに沈むのです。毎日が砂を噛むような苦々しさ、誠にツマラナイ、味気ない生活を送っているのです。ボクがタメ息を吐く時はそんな時です。なにか途轍もなく生きることの損失をしたような、大きな空洞を身体の中に覚えるのです。結果、ボクは単なる下宿人に収まってしまったというのが現状で、何時、家を出ようかとか、何時、別れようとか、そんなことばかり考えています。このことはボクだけでなく妻の方だってボク以上に強く思っているのは明らかです。双方、踏ん切りが付かぬないのは、やはり経済的目論見が立たぬことが一番でした。・・・年齢を重ねるごとに空漠々たる気持ちに襲われる、死と向き合う年齢になって知った奇妙な灰色風景、どんよりした天空が果てしもなく広がっている、というボクの心象。・・・

が、余り解説者のような御託を並べても仕方ありません、一応、ボクの家庭の背景を説明したのには、次のステップである例の燃え上がる恋愛話へは欠かせない理由になったからです。家庭が詰まらなければ心が外へ向かうのは止むを得ないこと、それは幼子でも年寄りでも何等変わりはない条件です、愛を求めて余所を彷徨うという。・・・

その^{にょにん}女人を知ったのは、五年前でした。ボクが^{とけい}齡、六十五の時です。名前を^{むすし}縷子さん、と言います。何でも、万葉集の好きな祖父殿が命名したと聞きました。万葉集 卷十六、(由縁有る雑歌、)に^{きんぐい}桜児と^{かづらぶ}縷児として登場する女性の二人の内の一ですが、死を賭けた三人の男たちの激しい求愛に、余りの切なさ^{せつなさ}と苦しみに悩んだ末、海で自死してしまう悲劇のヒロインだそうです。そこから拝借したんだとか。家族はそんな薄命のヒロインとは露知らず、旧制中学校の国語教師だったお祖父ちゃんの名付けに誰一人反対も無く決まってしまった経緯があったそうでした。御両親も万葉集に関心なんか無かったのでしょうか。現代では万葉集は手軽に読むことが可能ですが昭和初期の時代では解説本も^{ごく}極、^{きん}稀でしたでしょうし図書館も今ほどの規模ではありませんから困難だったとは言えます。・・・今時分の女性なら複数の男たちに言い寄られれば、もっけの幸い、好条件かどうかこっそりハカりに掛けたり、中には上手く手玉にとって^{かち}魘ったり駆け引きしたりするのが相場に違いありません。謂わば、打算的な恋愛が多いのですから。

こう申し上げるとお解かりでしょうが、縷子さんは、今年、^{ごんと}御年七十五歳の女性です。皆さんビックリなさったことでしょう。さらに申せば、ボクの恋愛は肉体関係も有り、などと大見得を切った手前、相手の女性は十代、さもなくば二十代、三十代の女盛り、違っても四十代、五十代辺りの熟年を想像したに違いありません。えっ！まさか！七十五歳の老女、冗談も程々に！とお思いになったことと考えます。ところがギッチョンチョン！ボクの恋人は、その七十五歳の縷子さんなのです。ボクとは五歳の年齢差ですが、今では二人はお互い、ニックネームで呼び合っています。しかし、これは愛の交換時間中のみ、ベッドでしか遣いませぬけれど。・・・少年になったボクが縷子さん^{むすし}を呼ぶ時は、カズちゃんです。少女の彼女がボクを呼ぶのはキーちゃんです。ボクの名前はキヨシですから、キーちゃんなのです。時々、縷子さんは、

(キーちゃんはキ印のキーですわ！)

なんて^{あざわら}戯けを言いますが。・・・皆さんも、ボクが七十五歳の婦人を相手にしていると聞けばキ印も納得！などと^{のたま}宣ふかも知れません。でも、ボクの頭には縷子さんは年齢を超えた大変魅力的な婦人に刻み込まれているのです。勿論、髪も白く、お顔にはシワも刻まれています。裸を拝見すれば、萎びた身体であることも一目瞭然です。しかし、あの眸の輝きや慈しみ溢れた表情には、そんじ

よそこいらの女性ではとても、とても太刀打ちが出来ない深い知性と慈愛の泉が覗けるのです。ひと言で申せば、それは宝石の心を擁した女人、と申して過言ではありません。全体から立ち上がる雰囲気は到底、七十五歳のお年を感じさせないオーラに包まれているのです。だって、人は精神的な繋がりが無くして合体が出来ますか？愛を感じますか？抱擁が出来ますか？単に肉体の交換であれば、それは双方が性欲に陥った自己満足だけのものです、一時の悦楽を覚えるだけのものです。しかし、現実には、その淫欲が大半、いや、ほとんどを占めていて、精神の交換までは程遠いのです。・・実にエラそうなことを申しますが、ボクなどは寡ってその典型者でしたから。

二人が接吻、愛撫、抱擁で抱き合うと身体が糾える縄のように一つになるのです。尤も、それに行き着くまでには四年の歳月を要しましたが。・・皆さんは、その交換行為を、ジイさん、バアさんの薄汚れたセックスと思うかも知れません。いい年をしてお笑いになるでしょう。或いは二人は何かに誑かされたとお思いになるかも知れませんが、これはまったくボクにも縷子さんへも失礼極まる話です。古今東西、西洋においても然り、東洋、取り分け中国の古典でも、こうした事例は枚挙に遑がないのです。いちいち、それを示すのも煩雑ですから止めておきますが。・・・

話が後先になってしまいました。ボクが蔓子さんと知り合ったのは、或る大学が主催する生涯教育の教室でした。一週間に一度の、(万葉集を詠む)講座だったのです。六十五歳を迎えたボクは、その頃からジワジワと忍び寄る家庭内不和にどうにも遣り切れなくて、そのうっ憤晴らしとでもいうのでしょうか、以前から興味があった古代人への生活様式の手掛かりの講座参加を決めたのでした。女性の参加者もいるだろう、そんなかすかな期待もありました。そこに縷子さんがいたのです。後で分かったことですが当時、縷子さんは七十歳の高齢者でした。他にも参加して講義を受ける五十、六十代の中高年女性に比べても目立って年寄りという感じはありませんでした。つまり、世間で申す老婆の感じがしなかったと云うことです。それは、ひとえに精神からくる若さだったのかも知れませんが或いは凜々しい顔立ちからやって来る雰囲気だったかも知れません。若い女性では滅多に持ち合わせない深い洞察力を伴ったような澄み切ったお顔でした。しかし、ボクがそう感じたからと云って他の人にはどう映っていたか分かりませんが。だからといって、おいそれと狎れ狎れしい態度は取れません。定数三十人の教室は二、八ぐらいの比率で男性陣は少なく女性が

多かったのですが高齢者達の生徒仲間も意外と難しいことがあります。人間幾つになっても嫉妬や妬みの感情は無くならないもので、婦人等へひとつの口を利くのさえ周囲に注意を払わなければなりません。ボクは初めから縋子さんを目当てに意識した訳でもありませんが頭の隅に婦人等を物色する気持ちがなかったかということはあながち否定できないでしょう。男の老人の浅ましさと申しませうか。・・たまたま、何度目かの講習会で席が隣り合わせになり意識したのが始まりでした。直ぐには会話は交わすことはありませんでした。ただ、その際、ノートにメモを取る彼女の字の見事さに感心したことをはっきり覚えています。サラサラとペンを走らせる、その文字の鮮やかさ、草書体でしょうか、実に見事な筆跡でした。ボクが悪筆だけに特段、そういう印象を持ったのかも知れません。何度か目に席をご一緒するようになりましたがまだ軽い会釈ぐらいで終始していたのです。口数の少ない、振る舞いに奥床しさが漂う古風なタイプの婦人、滅多に人と群れたがらない、優美であるながら硬質な感じ、それがボクの鑑定眼でした。講師の中年男性、N先生に向ける澄んだ瞳は熱っぽく輝き、微笑を見せる口元はまさに明眸皓齒の形容がぴったりだったのです。・・その日のこと、隣り合わせのボクは彼女から伝わって来る微量な香水に、えも言われぬ陶醉を感じてしまったのです。ボクは暫らく目を閉じ、その匂いに恍惚としました。久し振りの優美な感覚に溺れるばかりでした。ボクも新婚時代、当時は可憐だった妻に買い与えたのですが、今ではその記憶さえ失っていましたから。・・講義が終了しても席を立つことが勿体ないと思ってしまいました。彼女がボクに会釈して帰るのさえ気が付かない不覚を取った一瞬でした。何とか、彼女と会話の切っ掛けを掴みたい、強い願望がボクに萌してきたのです。だが、有夫かも知れませんが下手な会話を試みてそれとなく避けられるようになったら、これも又、悲劇ではありませんか。ボクは慎重に、慎重に、本当に慎重に、話の切っ掛けを掴みました。しかし、教室での話は、たとえ隣り合わせとは言いながらも用心しなければいけません。講師に礼を欠きますし、他の出席者からの反感を買いますから。・・ボクは考えた末に筆談を思い付きました。短いコメントをノートの端へ書いて彼女に読んで貰うのです。

(余計なお節介ですみません、いまお身体へ付けている香水の名は? ・・ボクはクラクラ陶醉しています!)

という風な。すると、彼女はあの明眸皓齒のお顔に嫣然と笑みを浮かべ、そのお返しにボクのノートを引き寄せて、

(あら、ごめんあそばせ！・・申し訳ありません！・・以前にも、或る方に顔をしかめられましたの！・・でも、たしな嗜みとして私には！・・)

と例の流麗な草書体で書き綴ってくれたではありませんか。予想外のあまり(ええっ、そうですか、ボクは全然、非難かなんかじゃありませんよ！、・・いやー、ウツトリしたんです！・・)

そう返答しました。実際、その筆談の経緯でボクは舞い上がってしまったのです。天にも昇る心地です。まさか、このような応答をしてくれるとは思っていませんでしたから。視線を送りますと彼女が乙女の如くにボクの眼には映り始めました。しかし、例えノートとは云え、饒舌は禁物です。ボクは余計なことを書き綴るのを慎むよう、己を戒めました。そうすると不思議なことに彼女の方から頃合いをみて、ご自分のノートへ書き込みをしてボクへ提示するのです。

(もう少しガンバリましょうね！・・)

と。・・・いや、いや、このイタズラ遊戯は堪らなく愉快でした。だからと云ってやすやす易々、お茶にでも誘ったら断られそうな気がします。また、見え透いたようにボクから接近するのも如何にもハシタナイと考えものでしたから次回からの講義には少し早めに出席しました。後からやって来る縵子さんがボクを見つけて横に座ってくれるかどうか、自由に決めればいいのですから。・・香水は・・ラッシュ(グッチ社)というのだそうです。馥郁たる香りと申しましようか、縵子さんの大層お気に入りだそうでした。後で気が付いたことですが、万葉集と香水の組み合わせは、数々の相聞歌へ結びつくような優美な絹織物の衣の感じをボクへ与えてくれました。

三ヵ月で一クルの講義は終了します。十二回の受講で彼女と隣り合わせになったのは都合五回でした。それでも、ノートの会話が二人を親密にしてくれたことは否めることが出来ません。わくわくした気持が盛んになり受講日が本当にボクを待ち遠しくさせました。講座は一ヵ月間のお休みが中に入って、それから再び向こう三ヵ月間で二クール目が行なわれます。次回二回目は十月の予定でした。

ご存知のように万葉集は、奈良時代に成立した我が国最古にして最大の歌集で、四百年近い歳月を掛け四千五百余の歌が収められています。受講するほうも根気よく学ばなければなりません。一日の学習は二時間、(間に十五分の休憩

を挟んで) 精々、三十首を学ぶのが限度です。午前と午後に分かれていますので都合の好いどちらかを選択すればいいのです。途中で出席しなくなる方も間々見受けられるようですが大方は生涯学習の名に相応しく、次々と講座を受ける常連さんが多いと聞きました。授業料は前金制度。近年は、この教室と同様、中高年者などを対象にしたカルチャー教室や大学講座での学習が盛んで、それは、定年退職者や子育てが済んだ婦人達のゆとり教育の一環の恰好の目的にもなっているのだそうです。ボクもご多分に漏れず、その口の一人で、家庭内不和もさることながら、十代の頃からおこなっている創作の好みもあって万葉集も勉強してみよう！と思い立ったのです。少年の頃からの夢だった文学を本格的に勉強したい！そういう強い希望がありましたから。・・四十五年に及ぶ長い寿司職人人生に終止符を打っていたことと、微々たるものですが国民年金を受け取る資格を有したので少しはのんびりしたい気持ちもありました。

聞くとところによれば、この万葉集講座は何年も受け続けている人もいるらしい、中には現役の高校教師まで学んでいる人気講座だそうですから大したものです。午後の講座は空き待ち状態でした。

○【あおによし、ならのみやこほ 咲花乃 きくはなの 薫如 におうがごとし 今盛着】・・小野老 (万葉仮名)

大宰府（福岡県）で詠んだ都への望郷歌のようですが、人口に膾炙した万葉集第一の歌でしょう、教科書にも載っている有名な歌です。

○【あかねさす 武良前野逝 むらさきのゆき 標野行 しめのゆき 野守者不見哉 のもりはみずや 君之袖布流】・・額田王 (万葉仮名)

これこそ、万葉集そらもろ（恋の歌）の白眉です。・・大化の改新（六百四十五年）をなした中なか天兄皇子（天武天皇）と、その弟のおほあまの大海人皇子との間で、妻（額田王）をめぐる争奪戦、寡あつての夫である大海人皇子（天智天皇）への、切なる慕情が歌に籠められているらしいのですが。

数ある相聞歌にも興味がありましたが、それ以上にボクは山上億良なる人物の詠む歌に惹かれました。彼は当時、筑前国守（福岡県、国司と違う）という地位ですから今ではさしずめ市長さん辺りに相当する役職らしい、彼が歌うの

は貧しい庶民の立場に題材を求めた作品が多く、【貧窮問答歌】などはその代表たる歌で、ボクは縷子さんに、

(大層好きな歌ですよ)

とノートで伝えました。そうして、

(ボクのような何処のウマの骨か分からない人間には妙に身に沁みた歌です、！・・・ボクは典型的な匹夫ですから・・・)

と少々自虐的に書き申しますと、その返事が振るって思わず声を立てて笑ってしまいました。十五分の休憩時間中でしたが・・・その答えとは何と！

(匹夫とは、御尻じゃありませんね、きよし様！)

縷子さんは、いけしゃあしゃあと、こんな川柳でお返しをしてくれたのです。それも澄まし込んでノートに走り書きをしました。まったく考えもしない言葉で、ただ、ただ、湧き上がる爆笑、続いて感激がやって来たのです。ユーモアも半端じゃなかったのです。これをもってしてもお判りのようにボクは一辺に縷子さんを好きになりました。ファンになったのです。

しかし、縷子さんのお住まいも家族構成もまったく分かりません。都内に違いないのですが・・・初めの頃は二言、三言を話しましたがノートで会話をする段から身の上話は控えるようになっていました。プライバシーには深く立ち入らない暗黙が双方にありました。問わず語りにご自分からお話をすれば別ですけれど。でも、そんなことはどうでもいいことでした。隣りにいる縷子さんと確実な心の交流が芽生え始めたからです。この日は、八月の最終講義日だったと記憶しています。気温が三十四℃という猛暑日で構内の自動販売機で冷たいお茶を飲んだのを覚えています。憧憬する乙女を慕う少年のごとくボクは改札口で別れる縷子さんを見送りました。お茶にでも誘った方がよかったかな、と一瞬思いましたが、あと一歩が踏み出せなかったのです。慎重に、慎重にの言葉が、ボクを引っ張っていたからです。。

(また、十月にお会いしましょう！・・・)

縷子さんは別れ際に優しく言って下さったのです。しかし、高齢者の我々には万が一病気に見舞われないとは限りません、えっ、まさか！という経験もボクには随分ありましたから、少し不安も募りました・・・それで一ヶ月の間は本当に長い月日に感じられたものでした。残暑の厳しい九月がボクの心身をジリジリと痛めつけ苦しめたのです・・・ただ奇妙なことにはこの期間、ボクは妻と一度も争いごとをしなくなったことです。何かこう、心にゆとりのような気持

があつて小言を喰らつても話られても腹を立てなくなつたのです。妻の方もそうになると、可笑しなもので暖簾に腕押しを感じたのでしょうか、我々夫婦に風ぎ状態が起こつたのです。きっとボクの様子見に廻つたかも知れません。不気味なような、不安なような、お互いが監視し合っているような状況が押し寄せて来たのです。

第二回の講座は時雨のしとしと降る日、十月の月曜日から始まりました。洒落た蛇の目の和傘を差してきた縷子さんは何も変わりはありませんでした。やや前より疲れたお顔でしたが風を引いたことぐらいだったと申ししていました。ボクはすでに縷子さんに会いたいために受講するような気分傾いていました。これはどうしようもない感情であります。切なく、悩ましい恋の病です。講師の先生の明快な講義も上の空、ぼんやりノートを見詰めることが多くなりました。人を初めて恋した少年の心が甦つたのです。眠り続けていた思春期がむっくり目を覚ましたのです。それで二人だけの筆談用にボクは一冊の大学ノートを使用する事を提案しました。そのノートはボクが持たないで縷子さんへ預け、受講日に気の向いた方が書き込むということにしたのです。止めるにしろ続けるにしろ彼女に選択肢を持って貰うことが大切でしたから。・・・この企画には彼女も面白がつて賛成してくれました。

(交換日記・・・ですね!・・・まあ、まあ!・・・)

縷子さんは目を白黒させておどけ顔を作りました。内心は上手に断られる覚悟もしていましたからボクにとっては大英断でした。・・・ノートですと割りとは大胆な書き込みが出来るもので、それをいいことにボクは俳句をひねったり詩人を気取ってみたり、コピーしたボクの小品を貼り付けて自称作家を称してみたり、と手の込んだアピールをしました。それは熊のいい恋文のようなものです。一週間でどのくらい待ち遠しかったことか!・・・

彼女は、必ずボクの書き込みにコメントをしてくれます。まるで小学校か中学校の教師が、教え子に教え諭すような具合に、

(あっばれよ!)・・・(素敵な詩だわ!)・・・(文章に品があります!)・・・(良いわ、三重丸です!)

等々、それは、それは、堪らないのです。

家庭のことに戻って恐縮ですが、妻やは文学、文芸などはてんで相手にしてくれません。ウソごと、絵空事の世界、と決め付けているようでしたから、そ

んなものに熱中する夫が元々許せなかったに相違ありません。金にもならない文芸に血道を上げ逆上せ切っている甲斐性なしの男に魅力なんか覚える筈がないのです、せっせと働いてくれた方がどんなに増しか、或いは別れたほうが清々すると考えているわけですから。

或る日の受講日、縷子さんから、こんな書き込みがありました。

(御機嫌よう！・・・よくお精が出ますね・・・きよし様は山上億良殿がご最良とおっしゃったけれど、わたくしのご最良もお明かししましょう、・・・わたくしは、家族や恋人と切なく引き離され九州の防衛に連れ出された防人達の歌に共鳴を覚えますわ、無名戦士たち、・・・第二次太平洋戦争の勉学途中で召集された多くの学徒達も同様です、その無念が千年以上の時を飛び越えてひしひしと伝わって来るんですもの、・・・防人と学徒動員は、天君と天皇の命令で自由を奪われた人間ですから同一人、！・・・丁度、私は十歳の少女でした・・・お慕いした或るお兄様も明治神宮外苑の学徒行進へ参加したのです・・・だから。防人の歌を早くお勉強したいんですの！防人として遠い西の知の果てへ派兵された人々の無念の想いを知るためにも！・・・)

家で書き込んできたようでした。・・・縷子さんには、冒頭に必ず(御機嫌よう!)の枕詞が入ります。匹夫であるボクの素性とは天地の違いがありそうです。・・・このノートへ書いてくれた文章には測り知れない縷子さんの呻きの声が伝わってきます。太平洋戦争で、恋うる人を失った乙女の無念が籠められています、前線でわけなく死んでいった男たちへのレクイエム、鎮魂の気持ちでしょうか。彼女はその傷を何十年も引き摺って生きていたのかもしれない。改めてボクは、彼女に堪らない愛おしさを覚えたものでした。ひよっとすれば、ずっと独身だったかも知れないという懷疑もおこります。一途な想いを抱きながら日々を生きて来た縷子さん、戦争の傷跡は六十年以上の歳月を刻んでもまだまだ終わりが無いのだと思いました。

ボクは返事を書くのに悩みました。仕方がないから、テレビで覚えた有名な反戦歌を書くことにしました。森山某という女性歌手が丁寧に歌う歌です。

さとうきび畑

ざわわ ざわわ ざわわ 広いさとうきび畑は ざわわ ざわわ ざわわ
風が 通りぬけるだけ

昔 海の向こうから いくさがやって来た 夏のひざしの中で

ざわわ ざわわ ざわわ 広いさとうきび畑は ざわわ ざわわ ざわわ
風が通りぬけるだけ

あの日 鉄の雨にうたれ 父は死んでいった 夏のひざしの中で
ざわわ ざわわ ざわわ 忘れられない悲しみは ざわわ ざわわ ざわわ
波のように押しよせる

風よ 悲しみのうたを 海に返してほしい 夏のひざしの中で
ざわわ ざわわ ざわわ 風に 涙はかわいても
ざわわ ざわわ ざわわ この悲しみは消えない

せめて縋子さんの抱えた戦^{いさ}への無念の憎しみをボクなりに提示したかったのです。それからでした、縋子さんがボクに胸襟を開いてくれたのは。きっと、ボクの至らぬ反戦思想もよく理解してくれたようでした。

(今日は、とっても嬉しいの！・・・こんな素敵な詩を綴って下さったんですもの！・・・この歌は、よく、知っています。わたくしも好きな歌です・・・きよし様はわたくしと、もう同志です・・・六十年前のお兄様が甦ったようですわ！・・・ありがとう！・・・ありがとう！ありがとう！・・・)

(大事なことを申しますわ！・・・わたくし、とてもあなた様が好きになりました。・・・お家へ帰ってからも時折、あなた様のことを心に思い浮かべます。・・・まさかとお思いでしょうが、わたくし、乙女に還ったような気持ちになるの！・・・で、ぜひ、お友達になってくださいまし！・・・お願い申します。・・・ただ、条件があるのよ・・・いい？・・・お互い、お住まいが何処とかご家族がとかお仕事は何か、プライバシーにはタッチしないこと、・・・だから、お家への訪問はありませんの、勿論、電話や手紙での連絡も無しよ！・・・それとお付き合いはこの万葉集講座日のみ、・・・一週間に一度になるわけだわ！・・・それでもいいかしら？・・・ごめんなさいね！・・・色々条件付けて！・・・それでも、ぜひ、お友達になりましょうよ！・・・これでも清水の舞台から飛んだような心持なの、よくって！・・・)

と結んでありました。大胆とっていい縋子さんの告白でした。それで二人は午前中の講座を選択するように替えたのです。お茶を飲む、映画や演劇を観る、美術館へ足を運ぶ、そんなことが可能になりました。ボクが誘ったり縋子さんからお誘いがあったり。

のちのち判ったことですが、やはり彼女は或る財閥の末裔で裕福な人でした。

しかし、ボク等は出自がどうの肩書きがどうのとかを通り過ぎた世代であります。ボクがしがない寿司職人であったこととか縷子さんが高家だったかとか、来し方を詮索したところで詮無いことです。これは縷子さんも同意見でした。

七十代と六十代の恋愛は華やぐばかり、恋とはこのように切なく甘美のものだったのかと感慨に耽ったものです。講座が終わると次のデート予定をノートへ書きます。縷子さんの予定日に合わせます。それから、四年が経ち、ボクと縷子さんは結ばれたのです。昼下がりにホテルの一室でくつろぐこともありました。当然、愛の交換もあったのです。縷子さん七十四歳、ボクが六十九歳でした。そうして、ボクは何知らぬ顔をして夕方に帰るのです。妻は昔から、自分勝手なボクの行動に嫌悪を抱いていましたから、それはそれで済んだのです。・・皆さんは、いい気なもんだ！とお思いになることでしょう。・・それは男と女の本当の恋を知らない人達が持つ妬みの感情と申して憚りません。人間が人間を愛することがこんなにも素晴らしいこと、気高いことだ、という事実を久し振りに思い出させてくれたのです。灰色の空気の老後を経て、冥界へ旅立つのがいい訳がありません。ボクは下手をすれば、その轍を踏んでいたかも知れません。妻との不和、家庭生活にうんざりしながら、いまさらどうする術も無い、諦めながら生の終わりを迎えるわけでしたから。・・縷子さんと巡り合わなかった、ならばです。

無論、妻とは趣味も違いました、価値観も違います。ひとつ年上の男であるボクと結婚したこと自体が彼女の下運の始まりだったかも知れません。それに比べて、ボクはこの年になってふとした切っ掛けで充実した気分で生活が出来るようになりました。老年を迎えてからの恋三昧！命の充足を感じています。・・後ろめたい気持ち、がないといえはウソになります、が、夫婦の形態が破綻状況では仕方ないではありませんか。・・・

万葉集の講義は続きます。全二十巻を学ぶには一般に根気が必要ですが、ボクは永遠に終わりが来ないように祈ったものです。縷子さんは、この講座が終了したら次は平家物語を受けたいと申ししていました。なんでも、源平盛衰記に比べると文章の美しさが格段に違いと申します。以前、勉強したことがあるらしいのですが再度受講したいと言っています。滅び行くある美しさ、ものあわれ、それに大層惹かれるんだそうです。ボクに異存があろうはずがありません。

四年に及ぶ二人の交換ノートは四冊を数えました。一年一冊です。ボクの手元にありませんから縷子さんが折に触れて読み返しているらしいのです。書き込む内容も主に、講座での復習が多くなっていました。縷子さんの書き込むデータの予定は、用心深く曜日を変えてあります。慎重さは半端ではありません。

(今日は、映画、如何かしら?・・・)(ゴッホ展、ご一緒します?・・・)(気分転換に寄席でも、どうです?・・・)という具合です。身に余る光栄を全身で感じながら、それらの由緒を根掘り葉掘り聞くことは差し控えました。ボクはすでに恋の奴隷である旨いた人^{めい}に変わり果てていました。逢瀬が楽しくて嬉しくて、前向きに生きる勇気と希望を与えてくれましたから。・・・それに一番大事な金銭面はほとんど縷子さんの持ち出しでした。彼女は大変気風よく支払いをしてくれました。

防人の歌、百首余の勉強も終わりに近づき、そろそろ長い講座も終了間近になったのです。或る時、ふっと、縷子さんとの熱愛が断ち切れそうなイヤな予感がしたのです。皇居のお堀端の桜の満開日、その花の下で、ふっとボクは不吉を覚えたのです。それは何の理由もなくボクの頭に忍び込んできました。美しく咲きほこる満開の桜の木々、無心に歩いている縷子さんに、はっと、病的な弱々しさを感じたのです。そうして、このような楽しい逢瀬が続くわけがないだろうと、疑惑が?黒く湧き上がってきたのです。・・・

案の定、その不幸は的中します。四月の最終講座日、縷子さんの姿がありませんでした。五月の一ヶ月間はボクにとって堪らない空白でした。ぼんやりとうつけ状態だったと思います。・・・六月、講座教室の事務職員からボクは一通の手紙を渡されました。毛筆の美しい書体でボクの名前が書いてあります。縷子さんであることは直ぐに解かりました。そこには実にイヤな文言が書き綴ってあったのです。ボクを絶望に追い込む、胸の張り裂けるような酷い内容を与えた手紙でした。・・・

突然、このようなことをお伝えするのはわたくし、心苦しいのよ!・・・ぜひ、判って下さいな・・・もう、わたくし、あなた様とはお会いが出来そうにもないんです・・・理由は・・・お聞きにならないで!・・・わたくし、本当に・・・本当に・・・苦しいの!・・・だってあなた様と別れるのは生木^{なまぎ}を引き裂かれるような痛みを感じますもの・・・ごめんなさい!ごめんなさい!・・・もうこれ以上、書くこと

が苦しいの・・・許して！・・・)

感情が乱れているのが窺えます。さらに別の便箋には、・・・こちらは冷静さを取り戻した具合で、

(わたくし、或るところのホスピスへ入ってるのよ！・・・驚いて！・・・そう、わたくしの身体は知らない内に悪性腫瘍に侵されていたんですって、転移もあるんだそうです、・・・いやーね！・・・だから、もう手遅れらしい・・・この手紙があなた様にお渡しになる頃は、わたくし、もう、ダメかも知れません・・・延命治療なんぞはゴメン被りますわ！・・・だから決してお探しになったり、訪ねて下さいませな！・・・それだけをお願いしますの。

あなた様との交遊は、しばしば夢の中にも出て来るくらい楽しかったわ、大層、幸せでした、・・・まさか、晩年になってから、このようなプレゼントを頂けるとは夢にも思いませんでした。お礼を申し上げます。ノートは棺ひつぎに入れてもらう約束なの・・・

ところで、このホスピスは窓からの眺めが実に見事なの、・・・眼下に美しい海の景色が広がっています、具体的に申せばお判りになるので控えますけれど、・・・それに一番肝心なこと、医師、看護師、職員さん、全員が親切で温かみのある気持で接して下さいの！・・・安心して次の世界へ飛び立つことが出来そうですわ。天女になれるかもしれなし竜宮城の乙姫様にもなれるんですもの。

家の資産や細々したことは、父の代からの弁護士事務所にすでに依頼してあります、何も思い残すこともありません。立派な旅支度でしょう！・・・ああっ、そう、そう、あなた様へ形見分けがありますの・・・お古の万年筆、わたくしがずっと愛用していたペリカン製よ、生前の父がわたくしに買って与えてくれたものです。ささやかなプレゼントだけとお受けして下さいな！事務局の方へ送ってありますから、・・・これでいい作品を創ることをお誓いしてね！・・・きっとよ！

もう、思い残すことはないわ、・・・元気に死んで行きます！・・・

死ぬということ、イコール無常なのよ！諸行無常なのよ！。

じゃあ、さようなら、します・・・本当にサヨウナラ！・・・ご運をお祈りして筆を置きます。

かしこ

縷子

茫然と立ち竦すくむボク、・・・余りに呆気ない幕切れであり別離であります。

なぜ？ どうして？ ・ ・ ・ そればかりがグルグル頭の中を回転します。 縷子さんがボクの手が届かない遠いところへ旅立ってしまう、間もなく天国へ行ってしまふ、そんなはずがあろう訳ないと幾ら否定しても。 ・ ・ ・

ボクはどうしたらいいのか、あんまりではありませんか、余りに唐突の別れではありませんか、ウソだろう、ウソに違いない。 夏のバカンスの下がる垂れ幕の向こうから軽快な音楽が立ち上がり、その雑踏の中で、ボクは、カズちゃん、カズちゃん、と咆哮ほうこうしていました。 全身の血が怒り狂っていたのです。 脳髓が割れそうでした。 なにか得体の知れない憤りが沸々と湧き上がります。 重心を失った奴だこが空中で失速しながら地上へ落下して行くような、そんな感じがしてなりません。 さらに、初夏の太陽がジリジリとボクを痛めつけたのです。

やがて、その激した感情が収まると、とめどなく涙が溢れてきました。 その涙の中に笑顔の縷子さんが映ってます。 ああ！ ボクはこの後、どう生きていったらいいのか、誰か教えて下さらんか？

○【 去年見而之 秋乃月夜者 雖照 相見之妹者 弥生放】 ・ ・ ・ 柿本人麻呂

一緒に勉強した4年前のこの挽歌を、天女のような縷子さんへ贈ろう、辛うじてそんな思いに耽ったのです。 —————